

『仮恋りみっとく 期間限定コイビトごっこく』

特典シナリオ台本

【登場人物】

菊池 梨見（きくち りみ）（18）

私立音羽女子高校の三年生。
校則に囚われない服装と雰囲気ある見た目から、
学校でも変わり者と噂されている。
本人は何かを纏っていない（キャラクターを演じていない）と
人と接することができない恥ずかしがり屋。
不器用だが憎めない、可愛げのある女の子。

《年齢》 18歳 《身長》 158センチ

《血液型》 AB型 《バスト》 B

私（16）

私立音羽女子高校の一年生。
素直で優しい女の子。緑化委員であり花や植物が好き。
恋愛経験はほとんどない。
梨見に振り回されているうちに、彼女のことが気になってくる。

《年齢》 16歳 《身長》 153センチ

【あらすじ】

『私』は、私立音羽女子高校の一年生。
緑化委員として、学校の花壇のお世話をしていたところ、
三年の『菊池梨見』先輩から突然声をかけられ告白されます。

「卒業するまで、あたしの恋人になって欲しい…！」
先輩に押され半ば強引に、期間限定の「恋人ごっこ」契約を結ぶことに！
不器用で愛らしい梨見先輩に振り回されながら、
甘い恋人ごっこを体験できる百合音声作品です！

【プロローグ..きみは天使みたいに立っていた】

○校庭・花壇（放課後）

私、ジョウロで花壇に水をあげている。

「あー……。んんん。」

（息を吐いて）ふう、……。よし」

「（呼びかけて）ねえ、そこのきみ！」

「そう、きみ。きみを呼んだの」

「あたしの目の前にいる、植物に水をあげている女の子」

「そんなキョロキョロしてー。他にいないでしょ？」

「急に話しかけてごめんね。」

びっくりしちゃった？」

「放課後、よくここ花壇でお花にお水あげてるでしょ？
ずっと、気になってて。声かけちゃった」

「えっ、あたしのこと知ってるんだ。嬉しい。」

「そう、三年の菊池梨見」

「この学校じゃ、ちょっとした有名人だって自覚はあるよ。
何かと目立つからねえ、あたし」

「制服？」

「パーカーの方が可愛くない？」

「どうして…？」

んー、女子高生って特別な時間じゃん？
三年で終わっちゃう期限付きの青春なわけで」

「だったら、自分の好きな格好してたいって思ってる」

「ほら、みてみて。この前髪、こだわりなの。
ちょっと、片目隠れる感じがいいのよ。」

「…ねえ、いいでしょ？」

「ふふっ、緑化委員の一年生、だよな？ きみ。
こう見えて梨見先輩は物知りなのだよ」

「あ、お仕事中だったよね！
時間とっちゃってごめん！」

「（つぶやいて独り言）あー…。どうしよっかなあ…。」

「え？ あ、いや、んー…。」

用事って程のことはないんだけど…。
聞いて欲しいことはある、というか…その…。」

「…ちょっと、こっち。
いいから、耳貸して？」

「突然なんだけどさ…。」

（耳元に近づいて囁きで）好きです。付き合ってください」

「…あれ？ 聞こえなかった？
好きです。付き合ってください」

「…うん、だから言ったでしょー？
突然だけど、って」

「超タイプなの。」

ずっと前から、めちゃうくちゃ可愛いと思ってて……」

「ひやかしかじじゃないない！」

「いたって真剣！」

「あー……。」

もしかしてあたし、距離の詰め方間違えた……？」

「うゝゝ……。」

なら言うけどさ、私だって、これには抵抗があったの！
そりゃさ、丁寧に積み重ねて行きたかったよ？」

「だけど、……ううっ、話しかけられなかったの！……緊張で！」

「話しかけるかずっと迷ってたなら、
もうすぐで卒業みたいな時期になってて」

「だから今しかないって。」

話しかけられたら、気持ち伝えようって思ってた」

「真面目に話してるよ？」

うん……うん。

きみが思っているよりも本気だよ？」

「からかってないって！」

だって、あたしはさ……」

「……ねえ、ちょっと、待って！」

ジョウ口に入っていた水が梨見にかかる。

「ひゃっ！ あー……」

「あ、ううん、全然大丈夫。
このくらい平気平気。
教室に体操着あるし」

「……そうだよね。
さすがに、ちょっと急すぎたよね。
……ごめん、あたし焦ってた」

間。

「うん……うん……。そっか。
恋愛経験は、恥ずかしながら、実はあたしもなくて……。
だからあ、こういう時どうしたらいいか、わからにゃいんだよねあ」

「……じゃあさ、恋愛初心者同士、『お試し』してみない？」

「私が卒業するまで、『恋人ごっこ』しようよ。
期限は、んー、あたしが卒業するまで」

「だって、恋愛経験ないんでしょ？
ならさ、いざという時に備えて、私で練習したらいいじゃん？」

「ほら練習しとかなないと、いざ好きな人ができた時に困るよ。
あたしみたいに、出会ってすぐ告白しちゃったり……。
ううっ、自分で言っただけで傷ついた」

「まっ、そんな難しく考えないでいーよ。
恋人ごっこ！遊びでいいから！ね？」

「連絡先、交換しよ！
スマホ、今持ってる？」

私、スマホ出す。

「きたきた、ありがとう。」

(呟いて) あ、アイコン可愛い」

「はい、手、出して？ いいから！」

「握手じゃなくて！」

小指を立てて……。

(早口で) 指切りゲンマン嘘ついたらハリセンボン飲ます指切った！」

「はい、契約成立！」

「ふふふっ、じゃあ、そういうことで。

今日からあたしの彼女(仮)、よろしくね！」

○屋上・お昼

「（私に気付いて）あっ！
おーい、こっちだよー！」

「えへへ、早いでしょ？
授業終わってすぐ飛んできた」

「今日晴れてよかったねえ。
…うん。冬の寒さが終わって、
（あくびを混ぜて）あつたかくなってきた」

「あ、ごめん。あくび出ちゃった。
なんか、眠くって」

「屋上、くるのはじめてでしょ？
普通は入れないからねー」

「ここの鍵、先輩から受け継いだんだよね。
うん、緑化委員の」

「え？なに？
…あっ、言ってなかったっけ？」

「うん、昔、所属してたんだ。緑化委員会。
去年辞めちゃったから、一年生は知らないかあ」

「そう、そのツテで、あの可愛い子は誰だ？ っとなって。
情報仕入れたっ」

「そうそう。」

昔、屋上に花壇があったらしくてさ。
緑化委員がそこを管理してて、その流れで鍵が受け継がれてる」

「今は、私だけの場所。」

そして、…はじめてのお客様」

「はい、ここ！隣、座って！」

私、梨見の隣に座る。

「憧れてたんだよねえ。屋上でお弁当。
いかにも恋人イベントって感じ」

「え、そう？ゲームだと鉄板じゃない？

どのゲームにも大体屋上でお弁当食べるCGあるじゃん」

「ゲームはよくやるよ。」

基本オールジャンル。

あでも、撃ち合いするのとかはやらない」

「好きそうってよく言われますけどねー。

ニガテなの、血が出るのとかそういうの」

「…：だつてさ、『痛い！』ってならない？
撃たれたら痛そうだなあって」

「え！なるよ！なるなる！」

ねえちよつと、今、馬鹿にしたでしょー！」

「ビビリじゃない！はい、この話は終わり！
ごはん食べよう！ごはん！」

お弁当を袋から出して、取り出す。

「えーっと、こっちがあたしで…」

「はい、きみの分」

「作ってくるって連絡したでしょ？」

「食べれないものない？ って聞いたし。

もしかして、信じてなかった？」

「そりゃ普段台所に立つタイプじゃないけど…」。

好きな人にお弁当作る夢があったの！」

「ほらみて？ あたしの力作」

私、お弁当箱を開ける。

「どう？ 見た目はそこそこでしょ？」

「味見してくれる？」

どれ食べたい？ ……これ？」

「じゃあ…」。

はい、あーん」

「え？ (ちよっと笑って) なに？」

恋人なんだから、やるでしょ？ こういうの」

「はい！ あーん！」

私、咀嚼する。

「どう？ おいしい？」

「…よかったー」

「じゃ、じゃあ、こっちも食べて？
あーん」

私、咀嚼する。

「ふふふっ、喜んで貰えて嬉しい。
朝早く起きたかいたががあったー」

「え？ あたしにも？ 食べさせたい？
あたしは、いいよー」

「……食べてるところ見られるの、恥ずかしい」

「まあ、たしかに。
恋人同士だったら、食べさせ合うのはフツウ、か……。
うう、わかったよお」

「……あ、あゝ（口を開けてる音）」

梨見、咀嚼する。

「（咀嚼しながら）あんまりこっち見ないでえ。
ニヤニヤしないっ」

「（咀嚼して）……うん、うん！
うまくできてる。
っ、次？ あゝ（口を開けてる音）」

梨見、咀嚼する。

「（咀嚼して）うん、うん」

梨見、水を飲む。

「（水を飲んだ後、離して）はあゝ……！」

「ねえ、世の恋人たちは

こんなこと平然とやってのけているのかね？」

「ねー。みんな進んでるにやあ」

「恋人ごっこしておいてよかったね。

いい経験になったでしょ？」

「ふふっ、まだまだ食べて貰いたいのたっくさんあるんだから！
お腹いっぱい食べてね！」

【EP02：マーガレット・タイム ～二人で花壇を回ろう～】

○校庭・花壇（放課後）

私、ジョウロで草花に水をあげている。

梨見がゆっくり近づいてきて、

「（耳元で）やっほ。」

きみの恋人、梨見先輩だよ？」

私、声に驚いて水やりをやめる。

「今日も綺麗だねえ。

……え？ あ、花壇がね！ 花壇！

もちろん、（小さい声で）きみも綺麗だよ……！」

「今日も緑化委員の活動でしょ？

手伝ってもいい？」

「やった〜！

ここはもう終わった？

じゃ、次のところはやるよ。

これでも元・緑化委員だし」

私と梨見、次の花壇に向かって校庭を歩く。

「うち、花壇多いもんねえ。

回るころ多くて楽しいよね」

花壇に到着して、立ち止まる。

「あ、水足りてる？」

「ジョウロ貸して？ 水汲む〜」

梨見、近くの水道の蛇口を捻って水を汲む。

「……よしっ」

梨見、蛇口を閉める。

梨見、お花に水をあげ始める。

「この感じ懐かしい……」

「うちでも観葉植物育ててるんだけどね。家庭菜園とかも。」

「……うん、すこし、齧ってる」

「こないだ食べたお弁当にも、
うちで採れた野菜使ってたんだよ？
水菜とかミニトマトとか」

「（褒められて照れて）まだ始めたばかりだけどね。
興味あったら今度教えるよ」

梨見、お花に水をあげ続ける。

「ん？」

「……えー、なんで緑化委員やめたかって？」

「……んー、それねえ……」

「活動は好きだったし、
委員会の人たちもいい人ばかりで、
嫌いじゃなかったよ？」

「今でも仲良くしてるし……」

「学年末の試験ね。

やったなあー。

やる科目多くて大変だよね」

「あ、じゃあ、お姉さんが勉強みてあげようか？
受験終り立てだから、まだまだ賢いよー？」

「よしよし。

それじゃ、今度の土曜日は？

うちでやろうよ。勉強会」

「……わかった！

じゃあまた連絡する！」

【EP03：スイートルームダンス（甘いお菓子でゲームしよう？）】

○梨見の部屋（昼）

私、紙に問題の答えを書いている。

梨見、その様子を楽しそうに眺めている。

「んー？ なにー？」

「どうしたの？」

ほら、勉強中でしょ？

集中して」

「え、邪魔してないでしょ？」

黙ってみてるだけ」

「……ふふっ、真剣な表情もいいなあ」

「ん、気になる？」

それ、あたしが可愛いってこと？

……こと？

…ねえ、ちょっと。無視しないで？」

「あ、質問？ おっけー」

梨見、私の近くに移動する。

「どれどれ？」

（話を聞いて）……うん……うん。

あー、はいはい。

意外と凡ミスしやすいんだよねえ」

梨見、教科書をめくってみせるように

「いい？」

これはさ、ここ見るとわかるけど……」

「……そうそう、さすが！かしこい！」

「できた？みせて？」

「……うん、はなまるっ！」

梨見、私の頭を撫でて

「よしよし。」

問題解けて偉いよ」

「ふふふっ、じゃあそれを終わったら休憩にしよ。」

「……うん、ふぁいと！」

私、引き続き問題を解く。

梨見、移動して

ペットボトルとコップを机に並べる。

「お茶かジュースか炭酸、どれがいい？」

（返事を受けて）……はーい」

梨見、ペットボトルの蓋を開けて、

二つのコップにそれぞれお茶（ジュース）、炭酸を注いでいく。

私の勉強がひと段落ついて

「おっ、終わった？」

お疲れ〜。

（コップを置いて）はい、どうぞー」

「あ、そうそう。」

お菓子もあるからねえ」

梨見、お菓子を机の上に置いていく。

「好きなお菓子？
えー、悩むなあ」

「甘いものは基本好きだけど……」。

あ、チョコ！ チョコは好き。

板チョコとか一枚バリバリっていく」

「ここにあるのだと、

チョコチップクッキー、好き。

ぽっていーも好き」

※『ぽっていー』とは、架空のスティックタイプのお菓子です…！

「（私が指さしたのに反応して）あ、ぽっていー食べたい？

（察して）……ええ！ ぽっていー食べたい?!」

「（ニヤニヤして）えー、えー、えー」。

そっかそっかあ」

梨見、ぽっていーの袋をあけながら

「（呟くように）ぽっていーって言ったならあれしかないもんねえ。

もう、しょうがないなあ」

梨見、ぽっていーを一本取り出して

「（ぽっていーを口にくわえて私に向い）んっ！」

「（くわえながら喋って）んんんっ！（※はやく!）

んーんっ！（※ねーえ!）」

梨見、私の反応がないことを見据えて

「んんっ（※もう!）」

梨見、そのままぼってぃーを一本食べる。

「（食べ切って）ちょっとー、なにしてんのさあ」

「ぼってぃーと言ったら、ぼってぃーゲーム。

恋人ごっここの定番でしょう？」

「むう……。やりたいって合図じゃなかったんだ」

「（真面目な雰囲気作って）」

「……。ねえ、あたしと恋人ごっこするのは、嫌になっちゃった？」

「勝手に楽しんでくれるのかなあって思ってただけど、もし嫌ならはっきり言ってね……？」

「あたし、嫌がるようなことはしたくないから……」

「嫌じゃない？ ほんと？」

「……。そっか。あたしも、楽しい。一緒にいるの」

「……。うん。……。うん。」

「へへっ、ちょっと安心した」

「（いつものテンションに戻って）だったらあ……」

梨見、ぼってぃーを一本取り出して、私に渡す。

「これ、一本持って。」

「それで、『梨見先輩、ぼってぃーゲームしよ?』って、上目遣いでかわいく言って?」

「だってえ、恋人ごっこ、まだ続けてくれるんでしょ? たまにはさ、そっちから何かあってもいいでしょ?」

「『梨見先輩、ぽってぃーゲームしょ?』さん、はい!

「(私の声を聞いてため息) はあああゝゝゝ。
あゝゝゝ、今あたし、死んだ、死んだよ。可愛すぎて。
カワイイの過剰摂取で無事死亡」

「……そのままぽってぃー、くわえてくれたら生き返る」

「ふふふっ、じゃあ反対側から、いただきますーす」

私と梨見、ぽってぃーゲームを始める。

ぽってぃーを食べ進めながら、顔が近づいていくことに
面白くなってきた

「(ぽってぃーを食べながら鼻で笑う) ……ふふっ。ふふふっ」

顔の間近まできてキスしそうになって

「(楽しそうに悶えて) んゝゝゝ! んゝゝゝ!」

キスする寸前で私、口を離す。

「(驚いて) んっ!

(離れた勢いに吹き出して) ふふふっ、ははははっ!!
ちよっと……ふふふっ、これやばいゝゝゝ」

「もう少しでキスしそうだった! ……ふふふっ!」

「え? 鼻息? 途中でかかった?

やだもうー、そういうこと言わないでよお」

「そっちのだって、かかってたよ?

ほんと! ずっとニヤニヤしてるんだもん」

「なんか。ドキドキするっていうより、面白くなっちゃったね」

「……うん。キスの予行練習？
にしては、お互い目ひらきすぎっ、ふふふっ」

「もう一本いっとく？
ウソウソ！ じゃーだん！」

梨見、飲み物を飲んで落ち着かせる。

「あー、楽しかったー！
またやろうねっ」

【EP04：リトルナイトの本音 く寝る前に声が聴きたいのく】

○私の部屋（夜）

EP03の続き。私、ベッドの上にいる。

寝ようとしたところに、枕元のスマホに着信。

梨見からの電話に出る。

「あ、もしもし？
今、大丈夫？」

「もしかして寝るところ…？
あー、ごめん」

「今日、昼間すっごく楽しかったじゃん？
……うん、うん。
そう、なんか、眠れなくなっちゃって」

「声、聴きたいなーと思って。
……そう、甘えてる」

「ふふふっ、そういえばそうだね。
恋人なのに、夜電話とかしたことなかったね」

「ちよつとだけ、話してもいいーい？
……ありがと」

「別に何か考えてたわけじゃないよ？
あー、嘘。それは嘘」

「もうすぐ卒業式でしょ？
あたしの高校生活、本当に終わるんだなあって。
……うん、実感湧いてきた、なんか」

「そうだねー。」

あの時、花壇で声をかけてからだいぶ経ったね」

「もう、ちょっと、懐かしい。」

あの時、声をかけてよかったなあ」

「……ん、なに？」

寂しくなってきた？

ふふふっ、あたしも寂しい」

「……卒業式までだもんね、あたしたちの関係」

「聞きたいこと？」

いいよ、もちろん」

「恋人ごっこ？」

どこまで本気って、どこまでも本気。

最初からずっと好きだって言ってるじゃん」

「好きになった理由？」

そうだねえ……」

「緑化委員、自分の意思でやめたんだけど、

しばらくちよっと未練があって、モヤモヤしてた時期があったんだ」

「そんなときに、見かけたの。」

花壇に水やりをしている姿」

「お淑やかで絵になる女の子だなあって思って、

最初は『超可愛い子がいる！タイプ！』って興奮して……」

「……はい、そうです。」

一目惚れしました……。

あー、恥ずかしいィ……」

「きみさあ、ちょっと自覚した方がいいよ？
かわいいうっていう自覚！」

……もう、ここにいる人一人、おかしくさせてるんだからね！」

「でも、まあ、それだけじゃなくって……」

「お花に向かってニコニコ笑っている顔から、
本当に植物が好きなんだろうなって気持ち伝わってきて」

「それを見てたら、

緑化委員だからお花を育ててたんじゃない、

お花や植物が好きだったから、活動してたんだって思い出して」

「そうそう。」

それで、おうちでお花を育てたり家庭菜園始めたりしたの」

「で、気付いたら毎日あの子いなくなってるようになって。
どんどん惹かれていった……。そんな感じ」

「……うん、他の誰かじゃダメ。」

あたしにとってきみは特別なの」

「……あ、あのさ、卒業式の日。
式が終わったら、ちょっと時間もらっていい？」

「直接、話したいことがあるの。」

……うん、ありがとう」

「あ、もうこんな時間。
結構しゃべっちゃった」

「じゃ、そろそろ切るね。
おやすみ」

梨見からの電話が切れる。

【EP05：きみはあたしの光　卒業、そして】

○屋上

卒業式の後、私は梨見に呼び出される。

ドアが開いて梨見がやってくる。

「おまたせ。」

「ごめん、卒業式の後、写真とか撮ってたら遅くなっちゃった」

「ん……？」

「なに？ 見た目？ 変わってる？」

「うん、普通に制服着ているの違和感でしょ？
あたしも全然見慣れない」

「そこじゃない？ ああ、髪ね。」

「うん、切っちゃった。昨日」

「びっくりしたでしょ？」

「どう？ 似合ってる？」

「へへっ、そう言ってもらえると嬉しいな」

「最後までいい学生っぽくしようかなって。
自分の可愛いは十分楽しんだし」

「それに、制服で会えるの最後だから、
きみの姿、両目でちゃんと見ておきたくて」

「今日まで恋人ごっこ、付き合ってくれてありがとうね。
おかげですごく楽しい毎日だった」

「高校生活の最後、サイコーの思い出をくれてありがとう。ごっこかもしれないけど、恋人みたいに過ごせて嬉しかった」

「先輩らしいことはあんまりできなかったけど……。あっ、」

梨見、ポケットから鍵を取り出して

「はい、これあげる」

「屋上の鍵。」

もう、あたし使わないからさ」

「……あー。」

えーっと……。ははっ。

いざ、こう、その時が来ると

何話したらいいかわからないもんだねえ」

「（間を埋めるために唸る）んー……」

「（小声で）……本当に、今日で終わっちゃっていい？」

「ん？」

別に大したこと言っていないよ？」

「聞こえなかった？」

「……じゃあ」

「ちょっと、こっちきて。

いいから、耳貸して？」

「突然なんだけどさ……」

（耳元で）好きです。付き合ってください」

「……ごっこじゃなくて、
本当の恋人になってください」

「……なに、ぼーっとして？
突然だけどって言ったでしょ？」

「……返事、聞かせてくれる？」

問。

「（優しい声色で）うん……」

○梨見の部屋・ベッドの上（夜）

別の日。とある休日。

私と梨見、制服デートをした後、

パジャマパーティーをするために梨見の部屋でお泊りをすることに。

しかし疲れて梨見、そのままベッドに倒れ込む。

「はああ……ベッドサイコー。

癒される〜」

「ほら、こっち！きて?。」

梨見に誘われて、私もベッドに横になる。

「ふふふっ、きたきた。

あたしのベッドに恋人がいる……夢みたい」

「なんか、ほんと、夢みたいな一日だったなあ。

まさか卒業してから遊園地で制服デートできるとは思ってたかった」

「ね？超楽しかった〜。

ネコ耳カチューシャ似合いすぎて、天国見えたよ。

あたしの彼女、天使か〜? って」

「昼間から、ずっと歩きっぱなしだったもんね〜。

もう足パンパン。

明日筋肉痛になってるよ、絶対。

今日は体力ゼロ〜」

「……え？ パジャマパーティー？

あ〜〜、そういえば！

そういうお泊まり会だったね、今日」

「ごめんごめん！

疲れに思考持っでかれてた〜」

「持ってきたパジャマ！ みたい！

あたしも着替える〜！ よいしょっと」

私と梨見、ベッドから起き上がる。

私、荷物からパジャマを取り出す。

梨見、ベッド下の引き出しを開けてパジャマを探す。

「えーっと、パジャマ……。

これにしょ」

梨見、私の近くに近づいて

「……えー！ それ持ってきた奴？

かわいいー！ 絶対似合うじゃん！

早く着て欲しい〜！」

「（咳く）あたしも着替えよっと」

梨見と私、着替え始める。

「（ぼそっと）下着かわいい……」

「あ、ちょっと！ 隠さなくてもいいじゃん。

女同士なんだし」

「（意識してると言われて）……え？ あ、まっ、違う！ 違うから！

変な意識とかないし！ 今日、何もしないし……」

「う、うん、今日は……ね。
さあ、なんのことでしょー……」

間。

「着替え終わったー？」

「わっ！わー！ー！」

え、やばいやばい！

可愛すぎてどうしたらいいかわかんない！」

「あたししかみれない！？

これを！？」

そんな幸福ってある？？」

梨見、私にくっついて。

「はあ~~~~~」

「（匂いを嗅いで）甘い匂いがする。

（さらに匂いを嗅いで）蕩けそう……」

「……あったかいなあ」

「ん~~~~~」

（あくびをする）

「ごめん、やっぱり、ちょっと眠気が……」

……あ、同じ？

じゃあ、もう寝よっか」

梨見と私、ベッドに潜り込む。

「……ねえ。」

もうちょっと、くっついてもいい？」

梨見、私の方に近づく。

「学校の外にも、こんな素敵な時間があったんだね。きみと会うまでは考えられなかった」

「卒業したら、ぜんぶ終わっちゃうんだーって思ってたけど、違った。むしろここから始まるんだね」

「……ふふふっ。」

あたし、今、すごく幸せだよ」

「……おやすみ」

少し時間を開けて、

梨見、私にキスをする。

「（キスをして）……ちゅっ」

○駅前

卒業後。大学生になった梨見とデートの待ち合わせをしている。
私は、梨見の留守電を再生する。

それを聞いている間に、本物の梨見が横からやってくる。

「（咳払いから、声を変えて）……あー、もしもし。
さて、問題です。」

「私は誰でしょう……？」

「（時計の針の音を真似して）チチチチチチチチ……。
はい、残念。」
「正解は梨見先輩でした。」

「ごめん！」

「さっき電車乗ってて電話出れなかった！」

「ダイヤが乱れてて、ちょっと遅れてるみたい」

「すぐ側まで来ているから、
もう少しで着くから、
待ってて！」

「今日も会えるの楽しみ！ ダイスキ！ 愛してる！」

ここまで留守番電話の録音。

途中から現実世界で梨見の声が聞こえる。

「おまたせ」

「いやー、ごめんね〜！」

いつも通りの時間に出ただけどさー」

「……うん、あー、わかったよお。

じゃあ今日のランチはあたしが奢る！」

「大丈夫。

バイトで結構稼いでるから任せて？」

「あのね〜、

お金は、一緒に楽しい時間を過ごすためにあるんだよ？
久しぶりのデートなんだから、満喫しないと！」

「……もう」

梨見、あなたに近づいて

「知らないでしょ？

あたしが今日という日をどれだけ楽しみにしていたか」

「……あー、もうダメ、我慢できない」

梨見、あなたを抱きしめる。

「ぎゅ〜〜〜」。

ふふふっ、会えなかった分、補給させて」

「えー、恥ずかしい？

「ーの」

「……だって、好きなんだもん」

「そうだよ？」

梨見先輩はこれからもきみを振り回すの。
期限は……なしっ」

「さあ、いこっ！」